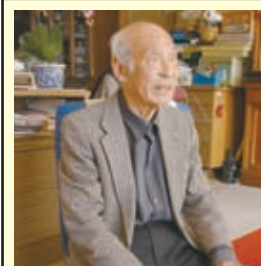


町内会連合会初代会長が「中の島」を語る



むらつばき みち道さん
村 椿 道さん
(大正12年生、84歳)
昭和26年から中の島在住。現在は同地区町内会連合会顧問。

土地改良と水害に悩まされた

開拓の話はいろいろと語り継がれています。木を切り、石を除き、すきを入れる。開拓者の苦労はそれは大変なものでした。何しろ、砂地で農業には適さなかったんですから。さらに、豊平川はほんらんによる水害で、せつかく実った作物が一夜にして流されることも度々あったそうです。

リンゴ栽培は、大正二年、岐阜県から入植した川村頼治氏によって本格的に始められました。平岸リンゴが有名ですが、中の島のリンゴも品質が良く、それが評判でした。しかし、農地開放や都市化の進展により、農家は農地を手放したり、貸したりして、リンゴ園は姿を消しました。



▲現存する当時の果樹園の入口(高橋家)

川の近くにさまざまな産業が

明治時代の中ごろ、遠藤石太郎氏は定山溪で木を切り出しました。その木は豊平川の流れに乗せられ、精進川に送り込まれて中の島にやって来ました。丸太そのものが流れてきたんですよ。丸太は馬車で道内各地に運ばれ、建築用に使われました。これは農家の副業だったと聞いています。大正七年の定山溪鉄道開通により、川を使った運搬は行われなくなりました。

大正十一年、山下友成氏は精進川から水を引く池を掘り、そこに張る氷を採る仕事を始めました。氷が厚くなるには長い期間がかかるため、一冬に二回しか採れません。採った氷は農家の馬車で札幌の中心部まで運ばれました。冬に仕事ができる、馬車が使えらるという



▲昭和初期の採氷作業の様子 ⑤

ことで、木材運搬とともに農家はちようど良い仕事だったのです。その後、水質汚濁などできれいな天然氷が採れなくなり、昭和十二年、山下氏は札幌で初めて機械による製氷を始めました。ちよつと意外なところでは、酸素工場と花火工場があります。いずれも豊平川を挟んで向かい側の

山鼻地区で商売をしていた人が中の島に工場を建てました。昭和四年、スキーを作っていた岩崎正氏は酸素を製造する会社を立ち上げました。スキーを曲げるためのガスとして必要だったからです。また昭和六年、小原市松氏は花火の製造所を移してきました。山鼻の宅地化が進み、危険になったからです。いずれの工場も、宅地化とともに昭和四十・五十年代に移転しました。

幌平橋は中の島発展の端緒

中の島を語るときに、橋は欠かせません。中でも、豊平川に架かる幌平橋は、街の発展の端緒と言えるでしょう。

明治・大正時代、豊平川を渡るには、幌平橋より二キロメートル下流の豊平橋を通らなければなりません。また、精進川に架かる橋も水車町に続く道しかなく、当時の子どもたちは距離的に近い平岸小学校ではなく、その道を渡っていきける豊平小学校に通っていたそうです。

昭和二年、河合才一郎氏は私財をもって木製の初代幌平橋を架けました。個人が架けた橋としては当時日本一と言われたそうです。建設費用は四万円(当時の米一俵が十円八十五銭)だったようです。これで、札幌の中心部との距離が縮まりました。しかし、すぐに洪

水で流されて、昭和十二年に北海道庁によって架け替えられました。それでも木製の橋はもろくて、穴がいくつも開いていました。私は中の島に来て商店を営みましたが、市場に行った帰りに、雨が降ると危ないので豊平橋を渡ることもありませんでした。



▲初代の幌平橋 ⑥

コンクリート製の永久橋が完成したのは昭和二十九年のことです。その後、豊平川の増水で何度か通行止めになりました。強固な堤防が築かれた現在はそのようなこともありません。

中の島に住んで



▲平成7年完成当時の現在の幌平橋

昭和三十六年に豊平町と札幌市が合併したり、バスと地下鉄が整備され、便利になりました。これは先人の開拓に懸ける努力があったことを忘れてはなりません。また、町内会をはじめ地域みんなの頑張りで、住み良い街になりました。今後も住民同士で助け合いながら、子どもがふるさとと感じられる街であり続けてほしいです。